

宮城から、伝えたいこと。

つながれ、どこまでも

Baton

バトン

VOL.

04

FROM MIYAGI

特集

あの日からの つながり

きて・みて【特別編】

- がんばろう! 石巻の会 (石巻市)
- HOPE FOR project (仙台市)
- 津波復興祈念資料館 閑上の記憶 (名取市)
- 女川1000年後のいのちを守る会 (女川町)

テーマ:

つながる つなげていく

あしたのクリエイティブ 伝承のオブジェ・プロジェクトの『伝承彫刻』

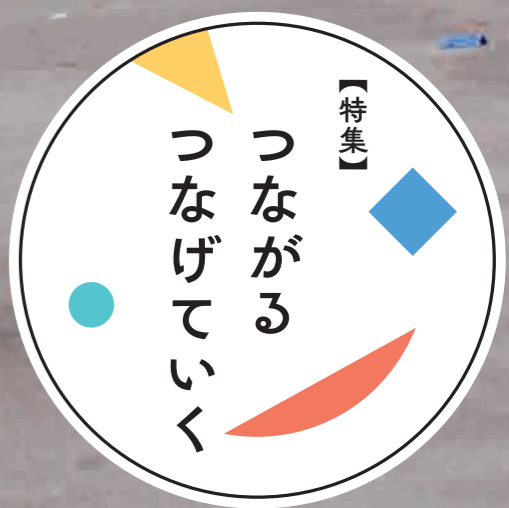
バトンとは

世代や地域を越えて広く「伝える」、リレーのバトンのように「つなげていく」という意味を込めています。
県内外や幅広い世代の方々が復興・伝承に興味を持ち、被災地へ足を運んでいただくことを目的に発行しています。

あの日からの つながり

東日本大震災は、一瞬で私たちが多くものを奪っていきました。その喪失感は、いくら時間が経っても埋めることはできないと思います。十二年経った今もあの光景が目には浮かびますが、これからの自分のために、これからの地域のためにこの悲しみを繰り返し返さないように願ひ、伝え続けていくことが必要だと感じています。

あの日から生まれたものも、たくさんあります。そのひとつが、人と人とのつながり。南三陸町と兵庫県三田市、亶理町と県外ボランティアの方々、さまざまな場所で、さまざまな交流が続いています。



当時の南三陸町の消防士 小畑政敏さん

対談

当時の兵庫県三田市の救急隊 松尾純一さん

p03

亶理町社会福祉協議会 生活支援コーディネーター兼係長 佐藤寛子さん

インタビュー

全国各地からの災害ボランティアの方々

p07

消防士 × 消防士

当時の兵庫県三田市の救急隊
松尾純一さん

当時の南三陸町の消防士
小畑政敏さん

絶えない応援が
前に進む力に

優しさ・温かさを
支え続けたい



南三陸町と三田市 それぞれのあの日

宮城県南三陸町と兵庫県三田市は、この十二年間、交流を続けてきました。およそ千キロ離れています。お互いの心の中では近い存在。とお互いのことを話します。交流のきっかけは、東日本大震災直後の南三陸町での救助活動。想像を絶する津波被害の中、お互いが懸命に任務と向き合う最中での出会いでした。

当時、気仙沼・本吉地域広域行政事務組合消防本部予防課課長を務めていた小畑さんは、発災後、隣町である南三陸町への影響も視野に、津波と同時に広がっていた火災の対応に一晚中追われました。

翌日、南三陸町の災害対策本部が設置された「南三陸町総合体育館ベイサイドアリーナ」（以下アリーナ）に向かいました。アリーナに到着すると、町の消防隊員たちは、機材や車、ロッカールームも流されたため、救助活動に必要な道具はもちろん、ユニフォームも防寒具もありません。そのとき着ていた服装のまま

救助活動を行うしかなく、誰が消防隊員で誰が一般市民かの見分けがつかないような状態でした。

一方、松尾さんは当時、兵庫県三田市消防本部の救急係長でした。松尾さんは、緊急消防援助隊兵庫県隊の第二次隊として三月一四日に兵庫を発ち、翌一五日に石巻市の宿営地に到着。そこで、南三陸町での救助活動を指示された松尾さんの隊は、集合地点とされていた南三陸町入谷地区を目指しました。

目の当たりにした 津波の威力

松尾さんは、南三陸町に入ったときの光景が今でも忘れられないと言います。

「我々は阪神・淡路大震災を経験しています。そのときは建物や家が崩壊して下敷きになる、閉じ込められるといった被害が多く見られました。ですので、東日本大震災でもその状況を想定していました。しかし、実際には全く違いました。この世界は何だろうと思うような…。自衛隊がつくった車一台がようやく通れる

くらいの道には、両脇にがれきの山が続いていて、その間を通っていくときのやりきれない気持ちは今も表現できません。「どうやって人を助けたいんだろう」と愕然としました」

小畑さんもまた、被害の大

きさに言葉を失ったと言います。

「家を失い、家族も亡くした人たちが避難所の狭い廊下下身を寄せ合っているのを見ると『この人たちのために早く環境を整えてあげたい』と思うのだけれど、目の前の対応

が精一杯で、泣いている方がいても声をかけることも励ますこともできませんでした。また、各県から応援に来てくれる消防隊・救急隊には、本来は命を助ける仕事なのに『申し訳ないけどご遺体があったら収容しやすいように平場に移動させておいてくれなにか』とお願いするしかなくて…。本当に苦しかったです」

小畑さんにとって「家族とも会えず、消防職員の仲間にも行方不明者がいて、最もしんどかった一週間」の最中。小畑さんと松尾さんは業務のやり取りを通じて顔を合わせました。小畑さんは言います。「松尾さんら応援に駆け付けた消防隊員の真摯な対応に本当に励まされました」

「絶対にこの人たちを支えたい」

松尾さんが緊急消防援助隊の一員として南三陸町で活動したのは一週間弱。変わり果てた町の状況を住民の方から聞くたびに、松尾さんは津波の威力を思い知らされる日々だったと言います。

また、皆さんの温かさにも



松尾さんが緊急消防援助隊として南三陸町に入った当初の光景。

たくさん触れたそうです。

「救急搬送をさせていただいた皆さんが、『わざわざ兵庫県から来ていただいてありがとうございます』『わざわざ兵庫県から来ていただいてありがとうございます』『わざわざ兵庫県から来ていただいてありがとうございます』とおっしゃるんです。それだけでなく、移動途中で道を聞いた住民の方なども『兵庫県からお越しただいて』と頭を下げてくださって…。その度に、なぜこんなに良い人たちがばかりなのになんか目に遭わないといけないのだろう、なぜこんなにたくさんの命を亡くさなければならぬのだろうという悔しさと、絶対にこの人たちが支えなければという気持ちが強くなりました」

小畑さんもまた、松尾さんたちの丁寧な活動を通じて強い思いを感じていました。

「松尾君たちが救助の記録をとっても細かく丁寧に取っていて、『この人たちは本当に頼もしいな』と感じました。松尾君たちが兵庫県に戻るとき、自分たちの活動服などを置いていきたいと言ってくれたことを後で町の職員から聞いて、過酷な中で活動している私たちのことを気にかけてくれるだけでなく、こん

なにも応援してくれるんだと、とても感動しました」

松尾さんが続けます。「アリーナで待機していたとき、婦人会の方が私たちを訪ねて来られたんです。『救急ですか？』と聞くと『違うんです。これどうぞ』とめかぶのカップを三つ渡されました。当初、『お気持ちだけありがたいいただきます』とお断りしたんです。けれども、『これは兵庫県から来ていただい

たみなさんに食べてほしい。今食べてもらわないと、次はいつできるかわからない』とおっしゃって。悩みましたが、ありがたく頂戴しました。石巻の宿営地に戻ってから、みんなが食べようとカップを手にしたとき、製造月日が『三月一日』だったんです。『次にいつできるかわからない』とおっしゃっていたのはこのことだったか…と、救急隊三人で涙を流しながらいただき

ました。『こんな南三陸町を放っておけるか？』と話しながら。町民の温かさ、優しさは、どんな災害が起ころうとも不変なんだなと感じて、応援し続けようと思えました」

これからのための交流と支援

松尾さんは兵庫県三田市に戻った四月、三田市消防本部予防課へ異動となり、三田市の二二〇の事業所で構成される「三田市防火安全協会」の事務局担当になりました。松尾さんは三田市防火安全協会として南三陸町への支援ができないか、そして支援を通じてこの協会の学びにもつながられないかと模索し、行動を起こしました。五月に協会員と共に南三陸町を訪れたのです。

「協会メンバーのバス会社からバスを一台チャーターし、約三〇名で沿岸部のがれき撤去ボランティアに来ました。そのときに南三陸町で黙祷をさせていただきました」その後、さらに何か支援ができないかと小畑さんに相談

「何か必要なものはないですか」と松尾君から声をかけてもらいました。「これからの住民が自然災害に立ち向かえるよう防災教育が大切だ。防災マンを一人でも増やしていくことが、自分たちの命と地域を守ることにつながると考えている」「防災教育に役立つ水消火器やプロジェクトが欲しい」と話したんです」

三田市防火安全協会は会員事業所が年会費を集めて運営する組織。松尾さんはその活動資金から「南三陸町の今後の『防災』に役立ててほしい」と、要望された用具を寄贈することとしたのです。

十二月に三田市防火安全協会の会長、副会長、事務局の松尾さんが南三陸町を訪れ、物品贈呈式が行われました。寄贈された用具は、今も南三陸町の防災教育で活用されています。

あの日からの気づき

小畑さんは現在、消防職員を引退され、町の教育委員として中学生たちへの防災教育に力を入れています。町内に



三田市防火安全協会から寄贈された、水消火器や、消化体験的的、プロジェクター、スクリーンなどは、現在も南三陸町の防災訓練で使用されている。(南三陸消防署にて撮影)



〈左上〉2011年12月、仮設の南三陸町消防署にて行われた物品贈呈式。〈上右〉2015年10月、三田市から寄贈された水消火器を使用し行われた、南三陸町での合同防災訓練。〈右〉三田市防火安全協会からの防災教育用具の寄贈は、2011年と2013年の二度行われている。



松尾君たちの応援が絶えずあったから、ここまで一歩ずつ進んでこれました。自分たちだけでは立ち上がれなかったと思うし、チャレンジなんていう言葉もなかなか出てこなかったと思います」

松尾さんも南三陸町での出来事を今も大切にしています。「阪神・淡路大震災が起こったとき、私はまだ消防職員ではなかったんです。だから、初めて災害と徹底的に向き合ったのは、東日本大震災でした。『どうやってたら災害から人を救えるのか』『どうしたら被害に遭った方の笑顔を取り戻せるのか』『どうしたら世の中がもっと楽しくなるか』というのを、常に考えるようになりました。東日本大震災が私の消防人生を変えたと感じています」

東日本大震災は辛く悲しい出来事であったことに変わりはありませんが、力強いつながりも生まれました。

支援をする人と支援を受ける人という立場のつながりから、人と人、まちとまちとしてのつながりに。



松尾 純一さん
兵庫県三田市消防本部 予防課 副課長。東日本大震災発生時は三田市消防本部 救急係を務めており、緊急消防援助隊兵庫県隊の隊員として南三陸町へ人命救助活動に入る。三田市消防本部の外郭団体である三田市防火安全協会の活動を通じて今も南三陸町との交流を続けている。



小畑 政敏さん
南三陸町教育委員会 教育長職務代理者 教育委員。南三陸町林行政区区長。東日本大震災発生時(2011年3月)は気仙沼・本吉地域広域行政事務組合消防本部 予防課長。4月から志津川消防署長として2013年まで勤務。現在は地元中学校での防災教育に力を入れる。

ある二つの中学校の防災学習カリキュラムは、歌津中学校が内閣総理大臣賞、志津川中学校が消防庁長官賞をそれぞれ受賞しました。「防災教育は、モノの使い方など、目に見えることだけを教えるのではありません。自然との共存を考え、生きぬくための知恵を自分の中に蓄えて、自分で判断できる力を身に付けることが大切です。勉強のような『一十一』という答えだけではない。子どもたちは、それに果敢に挑戦してくれているし、とても柔軟な発想で取り組んでいます。三田市からいただいた用具は、そういった防災教育の場面でとても役立つと思います。この子たちが将来どこに巣立っても自分の命を守る、そんな防災教育を目指しているんです」

一方で松尾さんは現在、三田市と南三陸町との新たな交流を企画しています。「今年の十月に三田市防火安全協会のメンバーが南三陸町を訪れて、一緒に防災訓練をする『合同防災訓練』を企画しています。南三陸町の復興

の様子を実際に見せていただいたり、町の方々と交流させていただき、三田市の方々もすぐく勉強になると思っています。また、この企画に私が後輩と一緒に取り組むことで、後輩に南三陸町との交流を引き継いでほしいという思いもあります」お二人の十年以上続くつながりは、お互いの人生を支える一要素にもなっています。小畑さんは、松尾さんたちの応援に心から感謝していま

力を借りることも
笑顔で返すこと



地域 × ボランティア

巨理町社会福祉協議会 生活支援コーディネーター兼係長
佐藤 寛子さん

やるべきことを
見失っていた数日間

宮城県南部、太平洋沿岸に位置する巨理町。東日本大震災で町の半分が津波で浸水し、多くの方が犠牲となりました。当時、佐藤さんは巨理町社会福祉協議会で「ボランティアコーディネーター」というボランティアの方々を支援する立場として勤務しており、職場で被災しました。

「『あー、どうなっちゃうんだろう』という不安と、とにかくパニックで何から手を付けていいかわからない状態でした」

職場は内陸にあり倒壊は免れました。職員たちは余震に備え屋外にテントを張り、通りがかった方々からの問い合わせに対応。避難所の場所を聞かれたり、住民の安否を尋ねられたりしたものの、佐藤さんたちも状況がつかめておらず、夜にラジオから流れてくる情報で、津波で大変な被害が出ていることを知りました。

「自分たちはただそこに居ただけのような感じでした。数日間は、『何をしなければいけないのか』を整理するのに必死でした」

「『あー、どうなっちゃうんだろう』という不安と、とにかくパニックで何から手を付けていいかわからない状態でした」

職場は内陸にあり倒壊は免れました。職員たちは余震に備え屋外にテントを張り、通りがかった方々からの問い合わせに対応。避難所の場所を聞かれたり、住民の安否を尋ねられたりしたものの、佐藤さんたちも状況がつかめておらず、夜にラジオから流れてくる情報で、津波で大変な被害が出ていることを知りました。

「自分たちはただそこに居ただけのような感じでした。数日間は、『何をしなければい

「初めの一か月くらいは、町内や近隣の町から来てくださる方で細々と片付けなどをしていました。顔を出して、知る知り合いもいましたが、ほかの地域に行ってしまうボランティアもいました。それが本当に辛かったですね。あのかの私は『もう自力で頑張る。誰の力も借りない』と意

固地になっていました」

時間の経過とともに、町民から支援を求める声が少しずつ増えてきたものの、ボランティアの人数が安定せず悩んでいた時、センター運営の応援に来ていた大学生が「もっと情報を発信した方がいい」とプログラムの更新に力を入れ始めました。

「こんなボランティアを募集しています」「手ぶらで来て大丈夫です」「こんな機材があります」「宿泊できます」など、詳細な情報を発信すると、少しずつボランティアの応募が増え、時にはたくさんの中学生在が朝早くからセンター前で待っていてくれたこと

もありました。

「五月の初旬にはボランティアの方が大勢来てくれて、巨理町の状況をどんどん情報発信してくれました。首都圏から来てくださる方も多くなつて、ようやく『困ってるって言ってもいいんだ、手伝ってもらってもいいんだ』と肩の力が抜けたような感じがしました」

笑顔で迎えて
笑顔で返せるように

佐藤さんがセンター長として心がけたことは、できるだけ周りの意見を聞き、そして、笑顔でいることでした。「職員の中には、自宅を流さ

れた方や家族を亡くした方もいて、本当はしんどくて笑ってられないのですが、『苦しいけど笑おう』をセンターのテーマに活動していたんです。ボランティアの皆さんをとにかく笑顔で迎えて、また来てもらえるように巨理を知ってもらおうとともに、気になつたことは言ってもらって、笑顔で帰ってもらおうと。町民の皆さんが自然とそんな気持ちになつていたように思います。自発的に自宅のお風呂を開放してくれたり、ボランティアのために炊き出しをしてくれたり、寝泊まりする場所を貸してくれたり……。みんなが『この町のために』とい

外からの応援が
町のチカラになった

ボランティアセンターの運営をきっかけに、たくさんの方の刺激を受けた佐藤さん。自らの閉鎖的な考えに気づかされた時間にもなつたそうです。

「それまでの私は県内や東北との関わりしかなかったのですが、あの時は大阪や和歌山など阪神・淡路大震災を経験した方々も応援に来てくれて、様々な考えやアイデアに触れ、自分の町を客観視することにもつながりました。そして何より、自分たちだけで頑張るすぎず、『助けて』と言っていないんだということにも気づかされました」

また、ボランティアの方々が増えることが、地域住民にとって応援になっていたと振り返ります。



佐藤 寛子さん
社会福祉法人 巨理町社会福祉協議会 生活支援コーディネーター兼係長。2003年にボランティアコーディネーターとなり、2011年まで平時のボランティア活動を担当。東日本大震災後に巨理町災害ボランティアセンターのセンター長を務め、のべ32,000人のボランティアを受け入れた。



〈上〉泥掻きやがれきの撤去作業など、ボランティアの方々の協力により作業が一段に進んだ。〈下〉巨理町災害ボランティアセンターでその日の作業内容を説明。リポーターで来てくれる方も多かった。



各地で続けられている追悼の機会や、東日本大震災の教訓を未来に伝えていく取組みを紹介いたします。



「HOPE FOR project」代表の高山智行さんは、七郷小の卒業生。同級生とともに、このプロジェクトをスタートさせた。

in 仙台市 震災遺構 仙台市立荒浜小学校 / HOPE FOR project



震災当時、荒浜小学校の校長だった川村孝男さん。現在は震災遺構の職員として震災の経験と命を守ることの大切さを伝えている。



黒板一面に書かれたメッセージは、そこに貼られた思い出の写真を取り取った地域の方々が感謝の言葉やふるさとへのメッセージを書き残したものだ。



震災前の荒浜の姿がわかるジオラマ。特に深沼海水浴場は仙台市唯一の海水浴場として多くの市民に愛された場所だった。



音楽イベントの会場は音楽室。在りし日の小学校にあった「音楽の時間」を訪れた方々と共有する時間になっている。



イベントでは色とりどりの風船が空を舞う。大切な人へ祈りを捧げる人、ふるさとを想う人、それぞれの想いをはせる時間になっている。

仙台市立荒浜小学校は、交流の場として幅広い世代が集う場でした。あの日、津波により多くの住宅が流され、校舎二階まで浸水。当時の校長だった川村孝男さんは「幸いにも毛布や非常食を三階に備蓄していたため、一夜を過ごすことができました」と話します。学校へ避難した住民は町内会ごとに教室に分かれて救助を待ちました。

現在、津波の脅威や教訓を伝えるとともに、在りし日の小学校として地域とのつながりを伝える場です。震災前の荒浜地区のジオラマには住宅や施設のみならず、それぞれの思い出も示されています。二〇一二年からは、毎年三月一日に荒浜小・七郷小の卒業生が中心となり「HOPE FOR project」として花の種を入れた風船のリリースや音楽イベントを実施。荒浜出身の方や荒浜にゆかりのある方がイベントを作り上げています。代表の高山智行さんは「荒浜小学校は震災遺構ではあり



DATA 震災遺構 仙台市立荒浜小学校 ●宮城県仙台市若林区荒浜字新堀端32-1 <https://arahama.sendai311-memorial.jp/> [https://www.facebook.com/HopeForProject/\(HOPEFORproject\)](https://www.facebook.com/HopeForProject/(HOPEFORproject))

ますが地域みんなの母校でもあります。日常的に足を運ぶことは難しくても、この日だけは穏やかな気持ちで母校へ帰れるように、この場を設けています。想いを無理に言葉にせず、風船や音楽を手段のひとつとして、イベントを実施することに意味があると思います」と話します。

風船は荒浜を彩り、校舎に響く音楽は放課後の風景を思い起こさせます。見える景色が変わった今も荒浜小学校は地域をつなぎ、ふるさとのシンボルとなっています。



事務局長の黒澤健一さんは間一髪で津波から逃れた。看板に地域の人々が想いを寄せる姿を見て、地元で希望を送り続ける覚悟を決めたという。

in 石巻市 がんばろう!石巻の会



看板の前には献花台と灯火が常設。「がんばろう!石巻の会」は祈る場を守る役割も果たしている。



灯籠には、家族や大切な人へメッセージを書くこともできる。毎年3月11日になると自然にこの場所に人が集まり、思い思いに祈りを捧げる。



灯籠づくりは地域の協力を得ながら毎年行われ、一般の方も希望すれば参加することができる。



5年に一度看板を作り直しており、2023年時点の看板は3代目。地元の中学生と一緒に制作することで、次世代への伝承にもつながっている。



最初に看板を設置した黒澤さんの自宅跡地は、石巻南浜津波復興記念公園に残る数少ない住宅の遺構のひとつ。

発災から一か月後、石巻市南浜地区に掲げられた「がんばろう!石巻」の看板。石巻南浜津波復興記念公園内に移転した今も、その前には石巻を想う人が集います。

看板の発起人であり「がんばろう!石巻の会」事務局長の黒澤健一さんは、自宅を流され、木によじ登り一夜を過ごしました。波が引いた後、かつての街を皆がうつむいて歩く光景を見て「何か希望を見出せるものがないか」と看板を設置。以来、この地で被災した方々を中心に地域に寄り沿った活動を続けています。

看板の近くには献花台と灯火が常設されています。絶えず燃える火は、想い続けることの象徴でもあります。

がんばろう!石巻の会が毎年三月一日に行う「3・11のつどい」では、四〇〇〇個以上の灯籠に火が灯り、参加者は家があった場所、家族が見つかった場所など思い思いの方向へ祈りを捧げます。灯籠は地域の方々の協力のもと、



DATA がんばろう!石巻の会 ●宮城県石巻市南浜町3丁目1-28石巻南浜復興記念公園内 <https://ganbarouishinomaki.jimdofree.com/>

ひとつひとつ手作業で制作されているものです。「最初は友人や知人と始めた小さな活動でした。どの取組も、手を合わせたたくてもその場所がない」というやり場のない思いを受け止める場所になっていきました。地域に真摯に向き合うためにも、自分たちの届く範囲で活動すると決めています。私たちの活動に携わってもらうことで次世代にも輪が広がっていくばと思っています」



震災後、社会科の授業を担当した阿部一彦先生。「子どもたちの発言と未来の命を守ることへの真摯な向き合い方には、逆に私が学ばされています」

in 女川町 女川1000年後のいのちを守る会

東日本大震災で、多くの人々の尊い命が失われました。地震後に起きた大津波によって、ふるさとは飲み込まれ、かけがえのないたくさんの宝物が奪われました。「これから生まれてくる人たちに、あの悲しみ、あの苦しみを、再びおぼせないように」とその願いで、「千年後の命を守る」名目の対策案として、①非常時に助け合うため普段からの絆を強くする。②高台にまちを作り、避難路を整備する。③震災の記録を後世に残す。を合言葉に、私たちはこの石碑を建てました。

ここは、津波が到達した地点なので、絶対に移動させないでください。もし、大きな地震が来たら、この石碑よりも上へ逃げてください。逃げない人がいても、無理矢理にでも連れ出してください。家に戻ろうとしている人がいれば、絶対に引き止めてください。

今、女川町は、どうなっていますか？
悲しんで涙を流す人が少しでも減り、笑顔あふれる町になっていることを祈り、そして信じています。

2014年3月、女川中卒業生一同



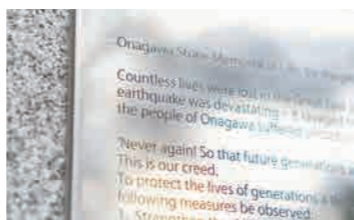
「1000年後のいのちを守るために」を合言葉に、授業で話し合ったことを広く伝えるために「女川いのちの教科書」や「女川いのちの石碑マップ」も自分たちで制作。



2基目の石碑の後ろに広がる竹浦の浜。45mも高さの津波が襲った。石碑がある場所はすべて、中学生たちが下見をし地域にプレゼンをした後に設置している。



小学6年生のときに女川の小学校に転校し、まもなく被災した渡邊さん。「友だちがまだ少なかったで、この活動が自分にとっては救いでもありました」。



石碑の後ろには、英語、フランス語、中国語の訳が刻まれている。これは住民の方からの要望によるもので、各国との永久的な交流を願ったこと。

3.11の際は、過去の石碑が移動されていたことでどこが安全か不明確だった場所も、そのためこの石碑には「絶対に移動させないで」の一文が刻まれた。

制作と設置に係る費用約一千万は、生徒たちが募金活動などを行い半年間で集めました。

メンバーの渡邊滉大さんは「中学生だった私たちが津波被害と向き合い、命を守るた

「中学生だった私たちが津波被害と向き合い、命を守るた」

中学生たちが発案したいのちを守る対策

二〇二一年十一月、「女川いのちの石碑」の二一基目が完成しました。これは、当時の女川第一中学校一年生による『女川1000年後のいのちを守る会』の取組。

二〇一一年四月、入学して最初の社会科の授業で「どうやったら津波被害を最小限にできるか」を学び、考えたことをきっかけに、取組が始まりました。生徒たちが掲げた対策案は「①互いに絆を深める②高台に避難できるまちづくり③記録に残す」の三つ。その、「記録に残す」方法の一つとして、町内にある二一の浜すべてに、津波到達地点より高い場所に石碑を建て、東日本大震災の教訓を記すとともに避難の目印としたのです。

「私たちがごく普通の生活をしていた、ごく普通の子どもです。そんな私たちの考えを、信じて支えてくれる先生や家族、地域の方々がいるから石碑の設置も実現できました。私たちのように、子どもが夢や希望を自由に言うことができ、それを大人が信じて支え、認めていける社会を創ることが、今の私たちの夢です」



DATA 女川いのちの石碑プロジェクト
<https://www.inotinosakihi.com>
https://www.town.onagawa.miyagi.jp/03_00_07.html (女川町HPいのちの石碑マップはこちらからもご確認いただけます)



代表を務める丹野祐子さんは「ここに来て良かったと感じてもらえるよう、悲しいことも辛いことも、笑顔で伝えたいと思っています」と話す。

in 名取市 津波復興祈念資料館 閉上の記憶



14人の生徒の命が失われた閉上中学校。当時の学校の机を子どもたちへの献花台としたことから活動が始まった。



もとは息子さんのために自宅の跡地に掲げていた鯉のぼり。空の上からでもここが閉上だと分かるよう、1年を通して空を泳いでいる。



館内には旧閉上中学校が解体される際に学校から引き取ったロッカーやユニフォームが展示されている。



現在慰霊碑は、名取市立閉上小中学校に隣接する「閉上プラザ」に設置されている。丹野さんは「たくさん触れてもらい、みなさんの温もりを子どもたちに伝える碑にしたい」と話す。



2020年の開催時は海にかかった2本の虹に向かって風船が飛んでいった。2本の虹=14色は閉上中学校で亡くなった生徒の人数と重なり、子どもたちの想いをより強く感じる光景となった。

「子どもの命が失われた閉上中学校。当時の学校の机を子どもたちへの献花台としたことから活動が始まった。」

遺族会を立ち上げ、二〇一二年には亡くなった生徒の名前が刻まれた慰霊碑を設置。その後「閉上の記憶」を開所し、現在は語り部などを行う資料館の役割を担っています。三月一日に開催される「追悼のつどい」では「空の上の子どもたちに手紙を送りたい」と、エコ素材の鳩型風船を飛ばし、空の上の大切な人へメッセージを届けています。海へ、街へ、毎年異なる方向へ飛ぶ風船は、子どもたちの気持ちを表しているようにも



DATA 津波復興祈念資料館 閉上の記憶 ●宮城県名取市 閉上東3丁目5-1 <https://tsunami-memorial.org/>

「閉上の記憶」は、人や命との向き合い方を学ぶ場でもあります。

「記憶は薄れゆくもの。だからこそ向き合い、語り合い、考え続けることが次世代へのバトンになります。悲しみも誰かと共有していいんです」と丹野さんは話します。

追悼のつどいは、地元の方はもちろん、東日本大震災に限らず、大切な人や家族を失った方も集まります。悲しみを共有しながら、この悲しみを繰り返さないよう後世へと語りつないでいます。



vol.04

『伝承彫刻』 伝承のオブジェ・プロジェクトの

言葉では伝えきれない体験を 彫刻を通して伝えていく

気仙沼市復興祈念公園は、復興する街の様子やこの街の人々がともに生きてきた海を

一望できる場所に整備されました。公園には、東日本大震災で

起きた様々な事実や教訓について、時代を超えて普遍的に語り継ぐため、四体の伝承彫刻が設置されています。「祈念公園に設置するものは見た人の感性に訴えかけるものでなければならぬ」とい

う菅原茂気仙沼市長の一言がきっかけで、伝承彫刻の企画・制作を担う『伝承のオブジェ・プロジェクト』が始まりました。



涙を流す女性の表情が印象的な伝承彫刻 No.1「ごめんね」。ともに津波にのまれながら、母親を残して逃げざるを得なかった少女の姿が表現されている。

市からの依頼でプロジェクトの座長を務めることになったリアス・アーク美術館館長の山内宏泰さんは、公園のあり方を検討する復興祈念公園施設検討委員会のメンバーであり、気仙沼市の伝承整備に先駆けて美術館に東日本大震災の展示を作るなど、伝承と向き合い続けてきた一人。市長の一言を聞いてすぐに彫刻をイメージしたと言います。「復興祈念公園はあくまで主観的な場です。ここに来るとき、被災した方は自身身の経験や亡くなった方を想うはず。では、被災していない方に何を感じてもらいたいか。それは被災者の想いや感

覚です。震災を経験していないくても、悲しい、うれしいという感情は普遍的なものとして共有できます。ただ、本当の意味で伝えるためには、相手の心を動かし、想像させること、「伝える意志と伝わる表現」が必要です」

〈右〉もう会えないと覚悟した大切な人との再会の瞬間をテーマとする伝承彫刻 No.2「よかったね」は、表情や身体の動きの細部までこだわり、切実な心情を伝えている。〈下〉プロジェクトの座長を務める山内宏泰さん。リアス・アーク美術館に展示されている震災後の街の写真や被災物を自ら撮影・収集し、深く伝承と向き合い続けてきた。



リアルな表現にこだわり じぶんごとにするきっかけに

山内さんはプロジェクトを始めるにあたり「気仙沼での出来事を冷静に俯瞰できる作家」として、リアス・アーク美術館の企画展をきっかけに、さまざまな形で気仙沼地域と

関わりがある秋田公立美術大学准教授・彫刻家の皆川嘉博さんに制作を依頼しました。「被災地を想像させるためには、被災した私たちの想いを可視化する確かな技術はもちろん、地域への理解と想いが欠かせません。ただ、制作者の主観が強すぎると作品性を帯びてしまい、プロジェクトとして伝えたいことがぶれてしまう。これらのハードルをクリアできるのは、皆川さんしかないと思います」。



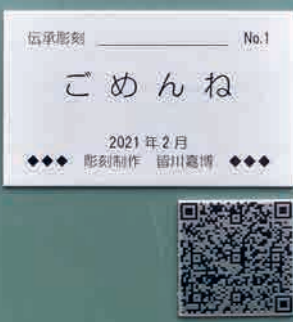
伝承彫刻 No.0「海へ」は唯一ストーリー先行ではなく、制作者である皆川さんの被災地への想いから作られた作品。海を想う気仙沼の人々の強さと優しさが伝わる。

被災者のリアルな心情と情景を伝えるため、お二人は綿密なやり取りと幾度ももの作り直しを重ね、二〇二一年三月一日の気仙沼市復興祈念公園の開園とともに『海へ』『ごめんね』『よかったね』の三体が公開され、二〇二三年三月一日には四体目となる『水をくみに』が公開されます。一つひとつの彫刻には物語があり、それぞれの台座にあるQRコードを読み込むと、彫刻の解説や物語に関連する

当時のエピソードを読むことができます。「たくさんの被災者の経験を、あえて特定の個人が想像できないような普遍的な物語として整理しました。その方が自分を重ね合わせて想像しやすくなるからです。創作性はじぶんごとにするためのひとつの手段なんです。彫刻は物語を可視化するように制作しています。彫刻単体を見るだけ

では分からないかもしれませんが、スマートフォンをお持ちの方は、ぜひ物語も合わせてご覧いただきたいと思っています。彫刻が表現している状況を理解した瞬間、感情が揺り動かされるはず」大切な人を目の前で失う悲しみ。絶望の中で生まれた喜び。混乱の中で誰かを思いやること。気仙沼の人々の海への想い。祈り。それぞれの

伝承彫刻は東日本大震災の姿や教訓を伝えています。現在、『伝承のオブジェ・プロジェクト』は、五体目の制作に向けて動き出しています。伝承彫刻はたくさんの想いをのせ、記憶を共有する「語り部」として祈念公園から気仙沼の街を見守っています。



〈右〉ひとつひとつの作品に細かな設定があり、被災者の心情やそれに伴う自然な身体の動きを表現するために何度も作り直しを重ねた。〈左〉彫刻そのものには詳細な説明は記されていないが、台座に付されたQRコードを読み込むことで彫刻が伝えるメッセージと当時の背景を理解することができる。



朝日のバトン

「シーパルピア女川」は、
初日の出がレンガ道にまっすぐ差し込むよう
設計されています。
それはまるで、朝日から
光のバトンを受け取るようです。

シーパルピア女川

宮城県復興支援・伝承課 ホームページ

復興関連の情報や、
みやぎ東日本大震災津波伝承館で行われるイベント等の
告知を行っているページです。
「きて・みて」に掲載している各伝承施設の「問い」の
答えもこちらに掲載予定。ぜひご覧ください。



ホームページは
こちらからアクセス！



<https://www.pref.miyagi.jp/soshiki/densho/index.html>

SNS

「いまを発信！
復興みやぎ」
も更新中！

Facebook
Twitter
Instagram
@fukkomiyaqi

INFORMATION

第1回みやぎ災害伝承ポスターコンクール ポスターカレンダー作成しました！

この度、多くのスポンサー様のご厚意により、宮城県で実施の「みやぎ災害伝承ポスターコンクール」受賞作品を掲載したポスターカレンダーを作成することができました。
一人でも多くの方にご覧いただき、作品を通じ災害について考えていただき、自分事として捉えていただけるきっかけになれば幸いです。
2023年4月始まりのカレンダーとなっており、無料にて配布しております（数に限りがあります）。ぜひ、ご活用ください。

【問い合わせ・配布先】
宮城県復興支援・伝承課
TEL:022-211-2443



Baton

発行元

宮城県震災復興本部(事務局:復興支援・伝承課)
〒980-8570宮城県仙台市青葉区本町三丁目8番1号 TEL:022-211-2443 FAX:022-263-9636

宮城県
Miyagi Prefectural Government

